

当院における過去 5 年間のカンジダ菌血症症例の傾向

◎寺口 皓¹⁾、宇都宮 孝治¹⁾、下元 由利香²⁾、小谷 敦志¹⁾、久保 修一¹⁾
近畿大学医学部奈良病院¹⁾、BML²⁾

【はじめに】カンジダ菌血症は、カンジダ属菌による感染症のなかでも最も重篤な病態である。適切な治療を行うためには、自施設のカンジダ菌血症の傾向を把握しておく必要がある。今回、当院における過去 5 年間のカンジダ菌血症症例の傾向について検討を行った。

【対象】2013 年 1 月から 2017 年 12 月までに提出された血液培養 8,589 セットのうち、カンジダ属菌が検出された 136 件について、重複を除外した 63 例を対象とした。

【方法】測定機器は VITEK2 ブルー(バイオメリュー・ジャパン)を用い、YST 同定カードにより菌名を同定した。同一患者で 30 日以内に同一菌が検出された場合は重複として除外した。検討対象について、年齢、性別、主病名、使用抗菌薬、中心静脈カテーテル使用の有無について後方視的な検討を行った。

【結果】検出菌の内訳は *Candida albicans* (Cal)が最多で 27 例、*C.parapsilosis* (Cpa)が 14 例、*C.glabrata* が 12 例であり、*C.tropicalis* と *C.guilliermondii* はそれぞれ 5 例であった。

対象患者の平均年齢は 70.8 歳、中央値は 74 歳であり、男女比は 2.3 : 1 であった。主病名は悪性腫瘍が 21 例と最も多く、次いで血液疾患の 11 例、消化器疾患の 10 例、心臓血管疾患と呼吸器疾患がそれぞれ 6 例であり、その他の疾患が 9 例であった。抗菌薬は 46 例で投与されており、そのうち、カルバペネム系薬などの広域抗菌薬が 27 例で使用されていた。中心静脈カテーテル(CVC)は 44 例で使用され、その内訳は、中枢挿入式中心静脈カテーテル(CICC)が 23 例、末梢挿入式中心静脈カテーテル(PICC)が 21 例であった。

【考察】血液培養から検出されたカンジダ属菌の内訳として、Cal が最多であり、加えて、経年的に non-albicans *Candida* (n-alb)の占める割合は増加傾向にあり、n-alb の中でも Cpa の分離数が最も多く、増加傾向を示していた。また、CVC 使用例において、CICC 使用群と PICC 使用群では血液培養のカンジダ属菌陽性率に有意差を認めなかった。

連絡先：0743-77-0880(内線 5623)